

紀行《イタリア文学》——カラブリア——

クレーリア・ロマーノ・ペッリカーノ Clelia Romano Pellicano (1873-1923) 著

『カラブリア物語集 NOVELLE CALABRESI』邦訳 (その1)

清瀬 卓

〈Sommario〉

Clelia Romano Pellicano nata a Castelnuovo di Puglia nel 1873, ha vissuto 50 anni di vita davvero intensa e laboriosa. È un vero simbolo della virtuosità femminile e una perfetta altruista, che ha saputo dedicarsi bene alle attività civili per la libertà e l'indipendenza delle donne del tempo. Sposatasi con il marchese Francesco Maria Pellicano all'età di 16 anni, ha partorito 7 figli, con cui ha condiviso tutta la sua giovinezza, spostandosi periodicamente alla sua tenuta di Gioiosa Ionica in Calabria, a Castellamare di Stabia e nella sua villa di Roma. Appena morto suo marito nel 1909, la giovane vedova ha cominciato a scrivere per varie riviste, quali *Nuova Antologia*, *Flegrea* e *La Donna* e a partecipare al Congresso Internazionale femminile tenutosi a Londra, come rappresentante del CNDI (Consiglio Nazionale Donne Italiane) per costruire una vera alleanza delle femministe di ben 21 paesi. Dopo aver pubblicato *La vita in due o Coppie*, *Verso il destino* e *Le novelle calabresi*, poche opere letterarie dal timbro piuttosto realistico, la nostra musa mediterranea muore a Napoli nel 1923, senza poter vedere realizzarsi il suo ultimo sogno del diritto femminile al voto e della parità tra i due sessi nella società italiana.

Per quanto riguarda le sue conoscenze scientifiche approfondite in specie sulla medicina, si sa poco su come abbia fatto la nostra scrittrice ad informarsi così bene del mondo provinciale dei medici. Può darsi che, nei discorsi con i frequentatori del suo salotto, la salonière sapesse imparare a memoria alcuni aneddoti o episodi, da uno dei quali potrebbe essere nato il presente racconto, tradotto in giapponese per la prima volta nel saggio di traduzione che qui presentiamo.

エフェメラル・フィーヴァー
《一過性発熱¹⁾》 (“UNA EFFIMERA”)

“スフィンクス”に捧ぐA “Sfinge”.

「いや、その時々で見返りが得れる愛などを、ぼくは話題にしていない。多かれ少なかれ、我々の誰にも手が届く愛についてではない…ぼくは、理想と詩の源泉となるような完全で偉大な真の愛について話しているのだ…想像力をかき立て、精神を高揚させる愛は、感覚を陶醉に誘い、心^{ハート}をすっかり虜^{とりこ}にしてしまうものだ。大文字で大書される究極の愛、そのような愛を、信じて頂きたいが、35歳にして、ぼくはまだ経験したことがないのだ…」

「最期まで神様のご加護がありますように、アーメン！」—— ひどい^{はんこん}癩痕が残る古傷^{うず}が疼くの
だろう、悲喜劇じみた口吻で、ジューリオ・ブリッツィは^{つぶや}眩いた。

「なぜ？」—— カルロ・クラヴェリは、^{ポリ・クリニク}総合病院の正面玄関に立ち止まって、その日、20本
目の^{たばこ}莖^つに火を点けながら^{たず}訊ねた—— 「君に断言するが、人生とか書物のなかで恋愛に遭遇し、他
の人々の視線や話題のなかで、それを呼吸し続けると、時として、我々のあり方を覆し、しばし
は破壊してしまうこの未知の宿命的な感情に対する^{ノスタルジー}郷愁のような好奇心にとられることがあ
る…それは、ほく以上におそらくは悩み、また愛しながらも、きっと楽しんでいる人類への一種
のやっかみだが。やっかみの半分は、自分にありふれた情熱に血道を上げる能力がないのを、恥
に思っているからだ。まるでそうした感情が^{かんがん}欠落している宦官並みに、他の人たちに比べて劣等
であると考えているかのようだ。」

ブリッツィは、ほんの数分だが、苦笑いをした。

ふたりの医師は、^{はざま}狭間のあるセルウィウスの城壁を正面に、^{ポリ・クリニク}総合病院の黄クロム色の別棟と緑
深い庭園とが互いに作り出している長方形のこじんまりした空き地—— 苦痛も姿を消し微笑むよ
うに見える^{サイエンス}科学の神聖な空き地を出ると、ポルタ・ピーアへと続く並木の美しい街路を歩いて
いった。

落日が遠くの糸杉の頂を黄金色に染め、ギザギザしたマロニエの^{はむら}葉叢の間からは、^{こも}木洩れ日が
射していた。^{ポリ・クリニク}総合病院別棟の^{ガラス}窓硝子は、夕日に^{あか}赫く映えていた。その^{バルコニー}露台上、病める女の物思い
に耽る姿がくっきりと浮かび上がった。正面入り口の鉄柵アーチを背にして、ひとりの白い前掛
け姿の看護人が、^{べっぴん}朗らかな^{メイド}別嬪の女中にちょっかいを出していた。あたりの静けさを破るものと
いえば、ただ野外を走る2頭の馬の^{ひづめ}蹄の響きと、孤独な散策から戻ってきたばかりの娘の駆けて
ゆく^{あしおと}足音だけだった。その娘はみすばらしい野草の花束を胸に、^{ベンション}頭髮も顔も紅潮させて、寄宿舎
へ急いでいた。

ふたりの友人は、路面電車の光っている電線に沿って、静かに並んで歩いていた。^{スリム}痩身で黄褐色
の肌の病弱なシチリア人ジューリオ・ブリッツィは、^{しっこく}漆黒の^{まなこ}眼の持ち主で、その^{まなこ}眼が生き生き
した^{はそおもて}細面に輝いて忘れがたい印象を与えた。地味なフロックコートをエレガントに着こなしてい
る赤ら顔のカルロ・クラヴェリは、^{かつぶく}恰幅のよい金髪のパエモンテ人で、背が高く首から上の分
だけ目立っていた。頭が薄くなりかけている彼もまた、薄手の栗色の外套にくるまっていた。そ
の^{ブルー・アイ}冷たい青眼は、ただ野心に燃えていた。

ふたりともに、職業柄というものが感じられなかった。ブリッツィは、医師というより、むしろ
^{アーティスト}芸術家といった風情だった。クラヴェリの方は、医師というより^{バンカー}銀行家のような風情だった。彼ら
は病院の同僚で、若い頃からの友人同士だった。カルロはジューリオが人情家なので、彼の^{うらや}ことを羨ましく思い、ジューリオの方はカルロがものに^{こたわ}拘らない^{しあわ}倅せな性格なので、彼の^{うらや}ことを羨ま
しく思っていた。彼らは、^ほ病院長の褒めことばと得意先から《声がかかる》ことを互いに張り
合っていた。

「君は何を聞きたいのか。」—— ジューリオは、^{さえぎ}話を遮って云った。彼は仕事でも暇な時も片

時も放さない馴染みのトスカーナ葉巻^{シガー}——彼の癩癩症^{かんしゃくしょう}の無抵抗な犠牲者——を口に銜^{くわ}えていた。彼は、帽子を頭の後ろへ傾けていた。その仕種^{しぐさ}は、彼の癖^{くせ}だった。「君は何を聞きたいのか。恋愛などは、要するに魂の病気に過ぎない。麻疹^{はしか}²⁾か犬の咳^{せき}³⁾のように生涯に1、2回経験しなければならぬものだ…その後で、ワクチンを打たれると…当分の間は。」

カルロは、可笑しくて仕方がない風を装った。

「君の考えでは、ぼくには人生に…免疫が出来ているとでもいうのか。」

「たぶんね。稀なケースだが、あることはある。ある人々は、この病^{やまい}に対する免疫が、大人になるまで維持される。やがて罹患すると、その場合は重症になる。それともかなりね…他の人々には信じられないことだが、君のように好運にも感染を免れる。女たちは秋波^{なかしめ}や仕種^{ポーズ}で、しきりと菌を接種しようとする。ちょうど血清反応で、天然痘を発症しない保菌者の腕のように、好運なこの種の人間の心は、女の魅力に反応することがない。…しかし、くり返して云うが、実に稀なこと、もし20年前に君と知り合いになっていなければ、きっとぼくはそんなことはありえないと主張していたことだろう…」

「ということは、ぼくの場合は特異なのだろうか。」

「おそらくね。」——そして、ジュリオは、火のなかですら死なないサラマンダー⁴⁾さながら生きながらえることができる特権を授かっているクラーヴェリのような人間のかたわらに、悪性の熱病に焼き尽くされ、恥ずべき色恋沙汰に毒された青春時代を経験して、再発に再発をくり返すうちに、執拗な苦しみのために、次第に老け込んでゆく運命にある彼ブリッツィのような別の人間が存在することを考えると、思わず溜息が出た。

彼は葉巻^{シガー}を捨てると、瀟洒^{しょうしや}な《ドゥランテ荘》と《パトリーツィ荘》に挟まれた半円形の小さな広場に立ち止まって、もう一本の葉巻^{シガー}に火を点^つけた。別荘の赤い煙突が、森の神秘につつまれた大聖堂の尖塔のように、敷地の陰気な広がりになじめない印象を与えていた。彼は葉巻^{シガー}を立て続けに何度も吹かすと、ふたたび歩き出し、こう云った——「《初めてちょっかいを出した小娘の女中^{メイド}にも、彼に初めて悩ましい秋波^{なかしめ}を送ってきた婦人用帽子店の売り子にも、学生の彼に窓辺の二つの花瓶の間から微笑みかけた感傷的な少女にも、若い従兄弟にも、結婚していた叔母^{おば}にも、大人びた未亡人にも…本当に、彼の心臓^{ハート}は一度もときめいたことがなかったのだろうか？一度も？》このように何度もぼくは自問自答してきたが、そのことを、もし君が知っていれば。」

「よく調べてみると、」——クラーヴェリはいつに似ず真面目になって、彼の話を遮^{さえぎ}ると云った——「ぼくの人生の穏やかな空にも、ある日、恋愛小説^{ラブ・ロマンス}の夜明けが始まるように思えた…」

「早朝にね！ぼくは、すでにそう云った！」

「ゆっくりだ！それは、真昼に至らなかった夜明けで、点火すると同時に消えてしまう一瞬の炎だ。これぞ、ぼくの感傷的不能^{インポテンツ}を証明してくれる典型だ。もし、ぼくがかつて愛さねばならなかったとすれば、それは、他でもない…」

「君は一度もぼくに、その素振り^{そぶり}すら見せなかった…とても興味が尽きないものだったはず

だ。』

「覚えている人が、誰かいたろうか？ そうだ、まだぼくが、M村で嘱託医師だった頃のことだ。覚えているかい？ カラーブリア地方の山頂に見捨てられた例の小さな村で、そこに、ぼくは幸いにも1年足らず滞在しただけだ。その期間を利用して、ぼくは助手職公募の準備をしたのだが…」

「覚えているよ。」

「その村は、こう表現することも出来るが、黒いあばら家ばかりの集落で、山頂の教会へと至る砂利の坂道が、ただ1本横切っているだけだった。住民と云えば、大半が移民となったごく僅かの百姓家庭で、今成金の農場主がいたが、その裕福な暮らし振りは、周囲の困窮と際立った対照を見せていた。農場主は村一番の立派な屋敷と云うか、住居という命名に相応しい邸宅を所有していて、彼にはひとり娘がいた…」

「その通りだ！」

「この娘は、林檎のように紅の射した小さな顔に、潤んで黒い大きな眼をして、巻き毛の豊かな黒髪と、山国育ちの女固有の健康と利発な頭脳の持ち主だった。その知性は、軽薄な世知にも穢けがされていなかった。」

「ほほう！ 処女地なのだ。心も、精神も、肉体も、すべてが純潔なのだ！ 小悪党め！ 主人公ヒロインがいるじゃないか。それで、君は色恋沙汰ロマンスがなかったとでも、ぼくに云い聞かせたいのかね？」

「聞いてくれ。15歳の娘のほとんど冒瀆ぼうとくてき的と云ってよい豊満な姿態と、血色の良い輝く容貌と、機敏で引き締まった容姿に打ち震えている旺盛な若さからして、ぼくはアナーイデのことが好きだった。病院の臭いと悪液質カヘキシ-の顔色と苔コケを生じた舌に慣れっこになった我々哀れな悪魔たちに、彼女の健康美が働きかける魅力からして、ぼくは彼女のことが好きだった。我々には、健康抜きに、女性的な美しさは想像すらできない…」

「実際、ぼくだって健康ではちきれそうな女に、いつも恋をしてきた。だから、ぼくは大抵は彼女たちにたまらない思いをさせられたのだ…」

「例の娘は、だからぼくには人類の素晴らしい実例サンプルに思われた。M村には、彼女のような娘がたくさんいてくれるように願ったもので、彼女に田畑でたまたま出会うようなことがあれば、しばらく立ち止まって、旺盛に繁茂する奇妙な植物の前に佇んで観察する植物学者の喜びを感じながら、彼女をじっと観察したものだ…しかも、ぼくはよく彼女に出会った。というのは、最善なのか最悪なのかはともかく、アナーイデには母親がいなかったし、父親は知性に乏しく蒲柳ほりゅうの質で、再婚した相手の家政婦兼奥様メイドに彼女の面倒を任せていた。夫人はダヌンツィオの《ルーコの女性》のような存在で、肘からニュッとむき出しになっていた逞しい前腕たくまのことを、ぼくはいまだに覚えている。浅黒い額のところで左右に分けている艶やかな髪つやの房に隠れて、きりりとした黒い眉毛が低い鼻の付け根でくっ付いていた。」

「ほほう、そりゃまた。」

「無口で笑顔をみせたことがないその女性にょしょうは、アナーイデの面倒をみていたが、まるで通りで

見かけた野良犬のように扱った。だから、気ままに育てられた少女は、野生児のように田野を駆け回っていた。」

「事情が飲み込めてきた。」

「君は何も判っちゃいないさ。」

「ああ、判っているとも…」

「いや、全然！…」

彼らはポルタ・ピーアの荘重なアーチの下に立ち止まって、互いに反論しあった。そのアーチの前から、別荘や城館や官庁や大使館が左右に建ち並ぶ広々とした^{ヴェンティ・セツテンプレ}9月20日通りが、高貴に一直線に伸びていた。サビーニ山地から微風がその背中にさっと吹きつけると、ブリッツィはブルッと身震いして肩をすくめた。一方、クラーヴェリは、ぶつぶつ云いながら、ふたたび歩き始めた。

「彼女が愛したのは男じゃなくて、医師だったと、ほくが君に云ったのだったら。」

「つまらん！」

「君には奇妙に思われるかもしれないが、これが事実だ。彼女の真っ赤な口を見ても、ほくは赤血球が豊富な若い血液を理解したにすぎない。ほくの眼をじっと見つめているキラキラと輝く大きな眼^{まなこ}を見ても、旺盛な生命力の輝きを認めただけだし、父親の農場の囲い壁の上からぶら下がっている筋肉質のスマートな脚を見かけても、ほくの動悸^{どうき}が一挙にたかまったわけではない。」

「朴念仁め！」^{かたぶつ}

「当初は、こうだった。やがて、山地の雪のように清浄で原初的な生き物そのものに相応しい^{どうもく}瞳目すべき彼女の無知のためにも、ほくは茫然となり、好きになったのだった。希臘語由来の彼女のお国ことばで、彼女が矢継ぎ早にまくしたてるのを聞いては、愉しんでいた。ほくは彼女に訊ねてみた。どうして、いつも君はぶらぶら出歩いているの？ 家で^{はたおり}機織をしないの？ 糸紡ぎをしないの？」

「彼女は肩をすくめて、若い雌狼^{めすおかみ}のように美しい歯並びをキラリと見せて、笑っていた。だが、ほくは彼女の家庭が地獄のようなのを承知していた。恐ろしく横暴な^{ままはは}継母と病弱でその横暴に受身でしか抵抗できない父親との間では、暴力沙汰に彩られた喧嘩^{けんか}が絶えなかった。だから、彼女は戸外に避難所を探していたのだった。南伊太利^{イタリア}のうっとりとするような自然に擁かれると、彼女は自分がホンモノの自然の愛娘である気がするのだった。

ある日のこと、ほくは何か話そうとして、《家はどうなっているの？》と彼女に^{たず}訊ねてみた。彼女は、《父はチェンツァ夫人に虐められているの》と答えて云った。

《で、彼は？》と聞くと、彼女は一瞬躊躇^{ちゆうちよ}してから、やがて軽蔑したような皮肉な口調で、《神様が虐めを認めているの！》と云った。

ある日の朝、^{かし}榿の木蔭で、サベエ⁶⁾の浩瀚^{こうかん}な本の頁をくっていると、突然、背後に彼女の気配を感じた。

囑託医の細々した仕事には、偶然にもその場に居合わせた百姓の助けを借りて、難しく込み込んだ外科的処置を（云うなれば）即席でやり遂げなければならない場合がしばしば起こる。それは、緊急の事態や重くのしかかる責任感から職務を遂行するでなければ、単独ではやりたくないような処置だ。また、毎朝、自分が昔使った論著をひっくり返してみる事が嫌ではなかった。外科医は誰でも人体という迷宮に迷い込んだテーセウスのようなもので、人体はぼくの眼の前に常に現前して、ぼくを保護している柵の樹が無数の葉を付け、枝が互いに絡まりあっているように、人体を包んでいる肉を通して、主要な臓器の調和した装置にも、血管と筋肉の巧妙な絡まりにも、ほとんど手で触れることができるかのようだった。その当時、ぼくは（多くの人々の命を救ってもいたが）何人かの人たちをあの世へ行かせてしまってもいた！ ぼくが叡智と才能だけに任せて、自分の意識だけを判断基準に、貧弱な身体に加えた例の《急場の処置》は、やがて後になって、もっと広い領域で、より慎重な手順が要求される場合に、驚くほど役に立った。…」

「脱線は止せよ。」

「だから、叫び声にハッと成って、ぼくは背後を振り返った。カラーブリアの《ガラテア》、ぼくのチャーミングなアナーイデが、手元に拵げていた図版に、吃驚仰天したように眼を見張って突っ立っていた。それは、人体のおぞましい図版で、頭の皮を無残に剥がされ、大きく引き裂かれた胸と腹部から、呼吸器や消化器といった臓器が露出しており、その彩色はとても派手で生々しく、まるで不運な標本が屠場からそのまま抜け出てきたかのようであった。

それがあまりに素直な驚きと恐怖の叫び声だったので、ぼくは思わず笑ってしまったほどだ。しかし、その恐怖には、魅了されている感触が混じっていて、小娘は矢継ぎ早に質問を浴びせてくるので、ぼくは彼女に恥ずかしい思いをさせないで、その本の図版を出来る限り多く彼女に示しながら、人体の部分とその働きについて概説したのだった。

もし、君が大きく見開いた眼をして、彼女がぼくのことばを飲み込んでゆく有様を知ることができれば。生体組織の奇蹟を眼の当たりにして、彼女のあどけない素顔に、不信と讚嘆の気持ち、光の効果となって交互に現れたことか！ 数日の間、彼女はジプシーの少女が魔法の秘訣を伝授してもらえる希望から、魔法に精通した魔法使いに感じる恐れの入混じった敬意を示して、ぼくに付き纏った。とうとう、彼女は卑屈になって、躊躇いながら《わたしのことで怒ってられるの？》⁷⁾と云った。そこで、ぼくは時間を無駄にしたくなかったので、否定はしなかった。ぼくは読み書きのテキストの助けを借りずに、ゲーム感覚で文字の綴りと発音を追ってゆきながら論著の解説を率先しておこなった。彼女は数週間経たないうちに読み書きを覚えた。それに、ぼくはせっちな先生だった。当時、彼女は、ぼくを休ませてくれなかった。自宅で読むために、自分用の本が一冊欲しいと云う。ぼくの方は、どうしたらよいのか困った。そこで、ぼくが持ってきた乏しい書物の中から楽しそうなものをさがしてみた。『貧しい青年の愛の物語』と題する本を運よく見つけ、それを彼女に持ってゆくと、驚いたことに、彼女は初めてお人形をプレゼントされた時見せたに違いない歓喜の感情を満面に浮かべて、それを受け取ってくれた。ぼくの

持っている他の本も、彼女の理解力と年齢を考えて、全部ではなかったが貸し与えた。その他にも、薬屋や教区司祭から本を借りてきた。どれぐらい彼女が理解していたのか、ぼくは知らない。ただ、彼女は、満たされることを知らない知識欲に駆られて、隅から隅まで貪るように全部の本を読んだ。」

「カルロ、もっとかいつまんで話してくれないか…」

「まあ、順番にぼくの話聞いてくれ。どこまで話していたかな？ そうだ…それからは、稀にしか彼女の姿を見かけなかった。時々、ぼくに本を返しにやって来ては、他の本を貸して欲しいと云ったが、別に自分の感想は語らなかつた。でも、感動した顔の表情とか、震えている手の感じから、大体の察しは付いた。眼を伏せて、慌ただしく《ありがとう》とひとことポツリと云ったが、その様子は彼女の見せた新しい面で、急にその時ぼくはもう小娘でなく一人前の女性である印象を持った。」

「感心な娘だね！」——ブリッツィは思わず漏らした——「君は狂恋を覚えなかつたのかね？ ぼくだったら、正直なところ、惚れ込んでしまっているところだ…」

「きっとそうだろう。ああ、聞けよ。もし、乗り合い馬車を一台拾えたら？」——クラヴェリは時計を見つめた——「米国の老婦人が気まぐれにもポルタ・カヴァッレツェーリ郊外に住んでいて、そこへ、ぼくは9時までに着かなければならないのだ…」

「なんてこった！」

「償いをしっかりやってもらうよ…」

気付かないうちに、我々はサン・ベルナルド広場に来てしまっていた。米国大使館の下手だった。片腕の柱だけが、星条旗も掲揚されずそこに立っていた。白亜の大理石からベルニーニ作《法悦の聖テレサ》が異教的な激しい感情を発散している貴族的なサンタ・マリア・デッラ・ヴィットリア教会前にも、歩行者の顔にすがすがしい《幸福の宝水》を3個の液体の団扇で吹きかけるモーゼの噴水の前にも、快適な乗り合い馬車がひしめき合っていた。何台かの馬車には、馭者が尊大に構えて、客の声がかかるのを待っていたが、その様子は、まるで紋章付天蓋の下で、昔の羅馬の王子が恩寵を依頼されるのを待ち望んでいるかのようだった。

「夕べになると、こんなにも爽やかなのだ。」——公衆浴場の噴泉がキラキラと輝き、宝石で赤く輝く酒杯をギョッと握り締めている巨人の腕さながら、一方の広場から別の広場へと伸びている狭い露地の奥をチラリと見ながら、彼は感想を述べた——「爽やかだから、ぼくはヴェネツィア広場まで、ずっと歩いて下って行くことを提案したいほどだ。そこで別れるとしよう。ぼくも郊外に訪問先があるのだ…」

「さあ、行こう。」

彼らは、通りの片側全体を占めている豪華ホテル——近代化の野蛮な格好をして冬場の華美を謳歌する神聖な記念建造物——の前を通った。眺めを見厭きた眼のようにピタリと閉め切った無数の窓に、彼らは見向きもしなかつた。一台の車が、ゆっくりと真向かいから進んできた。人気がない焼けた舗道は、小ぬか雨に濡れていた。まさにそれは、辻馬車や自動車でごったがえす

コスモポリス
大都会の季節に見られる舗道^{ほどう}だった。ちょうどその時、ホテルを目指す快樂の優雅な巡礼が通り過ぎていった。

「夏場の羅馬^{ローマ}は、伊太利^{イタリア}でもっとも爽やか^{さわ}かで感じの良い街なのに、いまだに《死の街》の《灼熱^{しゃくねつ}の午後》などと取り沙汰されている！」——ブリッツィは声高に云った。彼は、首都を熱烈に讚美する時、疫病流行の街だからと、6月から10月にかけて、そこから避難してもよいとは認めなかった。

「伊太利^{イタリア}でもっとも爽やか^{さわ}かで感じの良い街か！」——クラヴェリは認めて——「このままの方が良い。少数の我々だけが愉しければ。」

遠くの丘陵地から吹く湿り気を帯びたそよ風に、事実エゼードラの広場は広々と開けて生き返るような爽快^{そうかい}さに包まれていた。周囲は中央に木蔭が広がる庭園に囲まれ、そこには森の精たちの見張る噴泉が、銀色の水しぶきを上げていた。それに陽光はもう七色に屈折してはいなかったし、地平線を赤く染めてもいなかった。宵の大饗宴から戻ってきた数片の雲が、ほつけた紫^{すみ}の裾をたなびかせながら、巖^{おこそ}かに空を横切っていた。

「もし、ぼくたちが氷菓子を食べておれば？」——ブリッツィはアーケードの下にある喫茶店^{カフェ}を指差しながら誘った。色とりどりの衣装を纏^{まと}った裕福な人々が、南部伊太利^{イタリア}の暑気に苦しめられた身体に、その場所が提供してくれる二倍の気分爽快さを求めて、小卓^{テーブル}を囲んで屯^{たむろ}していた。——「君の米国女は数分ぐらい待つことはできるし、ぼくは君の話をどうしても聞きたいし…」

「そりゃあ、無理だ。道中、君に話してあげるさ…」

「そう薄情云わずに、お願いだ。」

クラヴェリはニヤリと笑うと、もう1本煙草に火をつけ、しばらく考え込んだ。やがて、おっとりと続けて云った。

「アナーイデの父親が亡くなったとの知らせを、ある日ぼくは耳にした。葡萄酒貯蔵庫^{ワインセラー}から穀物小屋へ通じる階段の天辺から転げ落ちて、無残な死に方をしたという。そこへ、チェンツァ夫人といっしょに胡桃^{クルミ}の袋を取りに上っていたそうだ。あるいは、穀物小屋から葡萄酒貯蔵庫^{ワインセラー}へ下りようとしていたのかも…ぼくは葡萄酒貯蔵庫^{ワインセラー}は知っている。とても勾配のきつい階段で、段差が大きいんだ。小太りの気の毒な老人は、胡桃^{クルミ}の袋を抱えて、まっ逆さまに墜落して、こめかみを階段の一番下のステップの角にぶつけたのだ。即死だったそうだ。」

「ぼくは呼ばれて駆けつけたが、死亡を確認するに終わった。ぼくはその際に、アナーイデがすっかり青ざめていて、恐怖の眼差しをしていることに驚いたんだ。彼女の眼は輝きをすっかり失って、不安そのものだった。」

「あらゆる良き土地の習慣に反して、彼女は泣きもせず、石のように堅い表情をして、仕種で非難と批判をかきたてようとしていた。一方、継母は、ただただ取り乱した苦しみのジェスチャーを見せて、長く美しい頭髪を引きむしり、金切り声と奇妙に取り繕った嘆きの声とを交互に挙げて、人々の賞賛と尊敬とをまんまとかちとることに成功していた。」

「で、君は、いったい君はどうだった。彼らのことばかり話しているが。」

「ぼくは…戸惑って帰宅した。不可解な謎にぶつかったかのように、ほとんど取り乱していたと云っても良い。しかし、別にそのことをあれこれ考えたわけではない。助手職採用試験まで、数週しかなかった。あのど田舎から早急に出てゆきたいとの思いは、鋼鉄製の刃のように、硬くひんやりと一直線に目標に向けられていた。アナーイデを世話している家政婦が、ぼくに来て欲しいと息せき切ってやって来た時、いつものように徹夜の勉強に備えて、書斎の燈火^{ランプ}を点したところだった。彼女は年齢も性別も分からないような醜い老婆で、歳月より習慣のせいですっかり耄碌して、ひん曲がった手で顎のところで押さえている分厚い布地のマントの間から、プナテンのように狡猾な顔が覗いていた。ジャンナという名前だったが、ぼくは『テンペスト』に登場する魔女に敬意を表して、シェークスピア風にサイコウラという新しい名前を付けてやった。チェンツァ夫人の《呪われた魂》との評判を博していたが、同じくアナーイデに忠実であることは知っていた。ぼくに出会うやいなや、彼女は両手を広げて、《お嬢さんが死にかっている！お嬢さんが死にかっている！》⁸⁾と金切り声で叫んだ。」

「アナーイデが？ 健康ではち切れそうだった彼女が！ まさか。」

「ぼくも、同じことを云っていた。そのような時間に呼びつけられると、まるで頭に瓦が突然に落ちてきたような感じで、やれやれと思ったものだ。でも、今回はアナーイデのことだったので、ぼくは躊躇^{ちゆうちよ}などしなかった。」

「ぼくは、その女にお目にかかりたかった。」

「ローデン・コートを着ると、鉄の握りのステッキと小さなランプを手に、ぼくは険しい坂道を登って行った。例の村を抜けて頂上の教会へと至る唯一の道さ。サイコウラは飛ぶように身軽に、ぼくを先導して進んだ。砂利道に小さな影法師が出来ていた。腰まで垂れているマント⁹⁾にくるまり、掌半分ばかり短いスカートからはみ出ているはげたシャツを見ていると、女というより幽霊のようで、箒^{ほうき}に跨^{またが}った彼女を、一陣の風が刻一刻と伝説的な黒魔術祭典^{サバト}へ運び去ってゆくような心地がした…」

「いやに、細かいな！ いい加減にしろよ。」

「今すこし、あの頃の例の土地の人々のことを思い出させてくれよ。まるで夢を見ていたような気がしないでもない。それほど今の生活からほど遠いものに思われるのだ！…」

「(カラーブリア地方の集落では、しかるべき家はどれもお屋敷造りだが)アナーイデの〈屋敷〉は、坂の途中にあった。数分もしないで、ぼくは彼女の寢室^{ベッド・ルーム}——広々とした大きな部屋の中へ入っていった。小さな燈火^{ランプ}が灯っていたが、部屋の中は薄暗かった…」

「大きな部屋の話は勘弁願うよ。」

「ああ、そのうち話してやるさ。聞く価値はあるぞ…ぼくは寢台^{ベッド}に近づいて、少女の様子を一目見て、熱で潤んでいる眼^{まなこ}を薄っすらと半分閉じて、切れ長の臉^{まぶた}が痙攣^{けいれん}している火照った顔を眺めるなり、家政婦が口にしたことが嘘ではないと納得したのだった。黙ったまま彼女の様子を観察した。イライラして興奮気味の彼女は、頭を絶えず枕の端から端へと動かしていた。手首の脈を診ると、脈拍は毎分110回だった。頭を高くさせようとしたが、意外なことに硬直した首筋

が邪魔して思うようにならなかった。咄嗟の出来事だったが、彼女は両手を首筋に持ってくると、ぞっとするような奇妙で変化のない叫び声を発した…ほくは理解した。」

「そりゃ髄膜炎^{ずいまく}だ！」

「そのようだった。すぐにも継母に知らせなければと、ほくは考えた。その間、アナーイデはうわ言を口走っていた。自分が、階段の天辺から底なしの奈落へと墜落してゆくように思われたのだ。彼女は寝台^{ベッド}に座ると、カッと眼を見開いて恐ろしい奈落の底を覗き込んだ。苦悶と激痛で額には汗が滲み、想像上の墜落を身体で真似て、想像上の地面との激突——というよりも、他のもの以上に激烈な発作だったが——のせいで、彼女はもう一回喉から搾り出すような痛ましい絶叫を発した。家政婦に呼び出されて、烏が羽根にくるまるように黒いベールをかぶって、継母はやって来た。頭からつま先まで黒一色だった。その様子は、今もありありと眼に浮ぶ。溜息をつき、ブツブツ云いながら、彼女はやっとの思いで部屋のなかへ入ってきた。フリンジ付カシミヤのスカーフに縁取られた陰気な顔をして、部屋の中を一途に見つめていた。その動作も表情も、古代の死者の壺に象られている《涙》のイメージにそっくりだ。土地のことばで、ほくは深刻な事態だと彼女に告げた。古典的に苦痛で出来上がった顔のことだ、同情とか驚きで筋肉が引き攣ったりすることはなかった。彼女は音楽的な大きな溜息を鞆のように胸から吐くと、病人の方を振り向き、葬送歌を口ずさんでいた——《辛いなのなのったら！このわたしが何をしたっていうの。娘は、死んでしまった。夢も希望もなくなった。わたしの人生みたくに、メチャメチャにされてしまった。》¹¹⁾

「その声音に、アナーイデは目覚めた。彼女は継母を、怒りと憎悪の炎の籠った眼つきでジロリと睨みつけると、すごい勢いで彼女を跳ね除けるようと両手をグッと突き出し、《出て行け！お前の顔など見たくもない！お前の声も聞きたくない！出て行け!!》¹²⁾と叫んだ。」

「彼女は、うわ言を云いながら再び枕元にくず折れた。墜落の悪夢が戻ってきて、彼女を圧倒し、支離滅裂なことばを吹き込んだ。憤りのことばと軽蔑の仕種に混じって、継母の名前が口をついて出た。未亡人の唇は、血色を失っていた。未亡人の眼差しは小刀の刃のように鋭く、まるで不安と叱責を交えて難詰するかのよう、家政婦——部屋の片隅にうずくまっていたが——を捜し廻った。《彼を呼びに遣らない方がよいと、わたしはお前に云わなかったかい？》未亡人は、ぞっとするような真実の一端をほくに漏らした。ほくの眼差しは、本能的にフリンジ付のショールで隠している骨ばった手や、運命の突きを与えただろう筋骨逞しい前腕にチラリと向けられた。」

「で、君はその怪物の肩をつかんで、戸口の外へ放り出さなかったのか？」——すっかり興奮したブリッツィが遮って云った。

「そんな思慮を欠いた行動は、アナーイデにとって何の役にも立たないばかりか、おそらく彼女を危険にさらすことになっただろう。分かるかい、少女が本意ながらどれほど悲劇的な場面を目撃するはめになったか？分かるかい、残酷な女にまだ何ができたか？怒りにまかせて暴力を振るって（故意だったか、そうでなかったかは、誰がはっきりさせることが出来よう？）、

夫をととう死に至らせた拳句に、もし女が継娘も片付ける方が都合がよいと考えていたとすれば。」

「やめろよ！ それに…セルビアの話じゃないだろう！」

「ところがだ、当の女賊なら、何だってやりかねないとぼくには思われたのだ。しかも、トリカブト¹³⁾や芥子¹⁴⁾が、あそこではすぐ手の届くところにあった…その地区の女たちは、子供を寝かしつけたり、病人を落ち着かせるために、それで煎じ薬を作るのが慣わしで…そのような事情だから、まれにそれを服用して死亡する者が出るのだ…田舎だと、この種の過ちはしばしば罪に問われることがない…」

「止めてくれ、お願いだ。鳥肌が立つ！」

「そこで、ぼくは慌てて、そのうわ言を聞きながら頭を横に振って《悲しいわ、彼女は頭が変だもの》と囁いているチェンツァ夫人を安心させ、(ここで、他に比べてももっとも苦しそうな嘆息が木霊した)父親が犠牲になった《不幸な事故》後、アナーイデの錯乱した精神に眩暈をおこす墜落の悪夢がとりつくようになったのは至極当然のなりゆきであることを説明した。一番親しい人々を自分から遠ざけたい本能的な必要性を感じるのは、もっとも重い病状の患者の多くに共通したもので、少女が(溜息をついて)継母に取った不意の反発の態度は、きわめて当然のことだった…継母は、ぼくのこぼしたことを信じたようで、その暗い表情がさっと明るくなった。ぼくは結果的に、病人の興奮を掻き立てないためにも、また通夜をして明かした夜の肉体的疲れをいやすためにも、しかるべき哀悼の気持ちに打ちのめされた精神をそっとしておくようにと継母を説得した。彼女はそれ以上のことを何も訊かなかった。少女を徹夜で見守るには、ぼくと家政婦だけでじゅうぶんで、もし危篤状態に陥った際には、呼びに遣らせると云って安心させると、継母は軽く会釈をして、底が抜けた太鼓の奥底から出てくるような音楽的な吐息をまたひとつ吐くばかりで、ぼくに礼も云わず退出していった。」

「ぼくとアナーイデだけになった。すると、急に素晴らしい闘志がぼくをとらえた。どうしたと思う？ 戦士が登場するように、医師が登場するのだ。耐え難い病気が発散する悪臭は、砂塵の臭いが白兵戦の熱気のなかで兵士を刺激する以上に、そのような時、ぼくたちのエネルギーをより強く刺激するものだ。科学と死とのすざましい決闘に勝利をおさめた後で、ぼくは自分に満足しきって仕事に取りかかったように思われた。」

「(一番近い薬屋が何キロも離れていたし、町の薬屋など一軒もなかった)家のなかにあったほんの僅かばかりの蠟引きの布を使って、その場しのぎの氷嚢を用意した。匙何杯かのラクトフェニン¹⁵⁾を投与し、枕もとに陣取って、その運命がぼくの治療如何にかかっている《素敵なヒト標本》と自分では呼んでいる病人を死から救い出そうと決意を固めた。さて、何を語ろうか？ 3日間というもの、彼女は生死の境を彷徨った。その3日間、ぼくは生きた心地がしなかった。一分たりとも眼を離さないために、ぼくは休息も食事も摂らなかつた。サイコウラ以外、誰も彼女に近づけなかつた。科学がこうした場合に用意してくれているありとあらゆる従来通りの治療法と思いつく限りの究極の処置を、ぼくは粘り強く熱心に試みてみた。どうしても、

この戦いに負けるわけにはいかなかった。ぼくは驚いたものだが、熱にうかされながらも薄いカバーの下で自信たっぷりの様子の思春期の^{からだ}身体が、はちきれんばかりの若さの隠されたエネルギーと相俟って、ぼくを助けてくれなかった。病人の口から漏れ聞いたことばの端々と、ひっきりなしにくり返された^{しぐさ}仕種のお蔭で、ぼくは《現場》をおおよそ再現してみることができた。いつもの口論が穀物貯蔵庫にいた夫婦の間で始まると、怒り心頭に発した^{まはは}継母は、呪いのことばを吐いて、^{クルミ}胡桃の袋を背負っていた夫を出口の外へグッと押した。アナーイデは悲鳴を聞いて駆けつけた。彼女が下の踊り場に姿を現したときには、老人が二回目の突きを食らって階段を転げ落ちる瞬間だった。《殺される！》と、彼はまっ逆さまに転落しながら、こうしたことばを叫んでいたはずであった。娘は奇蹟が起こることを願って、《^{マリア}聖処女さま、あなたの^{マント}外套で彼を^{くる}包んでやって下さい》と唱えながら、本能的に両腕を伸ばしていた。ところが、駆けつけて彼を^{くる}包んでやったのは、家政婦だけであった。彼女はアナーイデの助けを借りて、^{ベッド}寝台に彼を寝かしてやった。とすると、当初からぼくが予想していたように、幼い魔女は共犯者だったのだろうか？ 違う。でも、その犯罪を知らなかったのでもない。アナーイデの枕にぼくが視線をやるたび毎に、^{まなこ}ぼくの眼が引き寄せられた陰惨な秘密には、堅く閉ざされた例の口——女主人の一語一語に微かに打ち震え、ほとんど一挙手一投足を見張っているような口は、ぼくを戸惑わせた。ぼくも黙って不承不承漏らすことのなかった例の秘密が、性格が似てもいないにもかかわらず、ぼくたちの間に共犯関係をつくり上げたことを、ぼくは不安を感じずには考えることができなかった。それは沈黙の共犯関係だった。]

「ところが、君の沈黙はバレている。」——ブリッツィが^{あい}間の手を入れた——「女中は、当然のこと食い扶持のパンを保証しているチェンツァ夫人の云いなりだったから。君は、あすこじや医師の仕事をやっている、巡査——君には軽蔑の対象にしか過ぎない職業だが——ではなかった。アナーイデは、では、彼女は何者なのだろう？ どうして彼女は告発し、大声で非難しないのか？ 父親の死の裁定者として仇を討つために立ち上がらずに、どうして葬式のような卑猥な喜劇にのこのこ出てくるのか？」

「ぼくだって、復讐ということにかけては容赦しない残酷な人々の性格を知っている以上、その時ぼくの頭がちゃんと働いてくれておれば、そこのところは自問自答したことだろう。このぼくは、その時ばかりは、分かるだろうカルロ・クラウヴェリ、アナーイデの青春を台無しにしくななかったので、ぼくの青春時代の10年だって惜しまなかつたらう。それで、ぼくが実に稀なことだが、不安な面持ちで彼女の上に身を屈めた時、あまりに《変な》顔つきをしていたに違いないと見え、少女の眼差しは感謝の気持ちではなく、驚きを露わにしていた。ぼくがやろうとしたことは、実際のところ、前代未聞で奇妙なことだった。考えてもみてくれ。職務とか検査の用意とか日常生活の利害とか必要性とか慰めとか、そのすべてをすっかり忘れて、まるで時間や人生がどこかへ行ってしまったかのような具合だった。ぼくの全世界は、類稀な犠牲者が死と戦っているその窮屈な空間に集約されていた。死に一步譲るなどという考えは、ぼくの^{きょうじ}矜持がなんと許さなかつた。ぼくの全存在は、^{むしや}武者震いしながら反抗の構えを見せていた。これこ

そ愛というものなのだろうか。これが愛なのだろうか、教えてくれ、ジューリオ、君はこの種の病には経験豊富だから。」

「いったい君は何者でありたいと思ったのかい?!」——ブリッツィはふき出したが、それは他人が疑ってみることが出来る余地がある考えを笑おうか怒ってやろうか分からなかったからだ——「それが愛というものだ。しかも正直者のね。」——「むしろ、ぼくが云うように、《意地悪者の》ね。」

「それは、愛は、ご覧よ」——ここで、彼は気に入りの不運な人の診断を行う場合に見せるもったいぶって秘密めかした調子になった——「観念論者では魂に、唯物論者では感覚に、庶民では心に住みついている愛というものは、結局のところ想像力の病気に過ぎないのだ。これは確かだ。危険な微生物が眼と聴覚から入ってきて、大脳へと導かれ、そこで幻想を養分に、ちょうどゼラチンか寒天のなかで培養されるように増殖するのだ。神聖な砦の高みから思考へと、破壊をやってのける。火花のようにパッと空想に火がつき、血管が炎をあげ、心臓は激しい動悸をうつ。その熱は全身に限なく拡がって、体温が高くなると、他の微生物同様に、自らの火に焼かれて死んでしまう。やがて、もし増殖するのに好都合な土壌が見つかり、その毒性があらゆる抵抗も無駄な段階にまで至ると、患者の体内で害毒と非可塑的な^{アンバランス}不均衡を生み出す。やがて、もっとも重篤な場合だと神経衰弱から、患者は気がふれて、時として死亡することがある…そのような症例は稀ではない。」

「それどころか、新聞の三面記事は、そのような話ばかりだ。」——クラーヴェリは、ちょっとり嘲笑するように相槌を打った。

「君の症例を例に取ってみよう。」——ブリッツィは、クラーヴェリに構わず、続けて云った——「その時点まで潜伏期にあって、君自身に不明だった病気が、不意に発現して、最初の激烈な発作に君を釘付けにした3日間、微生物に悩まされた君の空想力は、高速車のエンジン以上に過度に興奮させられていたに違いないと思う…」

「何たる^{たと}喩え！」

「証明して欲しいかい？ 君はずっと《悲劇的な症例》を頭に浮かべ続けていた。片田舎の寒村の《世間知らずな田舎娘》で、豪農の相続人であるチェンツァ夫人の^{ままこ}継子が、もうちょっとで^{とぎはなし}お伽噺の王女に変身しようとするところまで、君は無垢な犠牲者を詩的な存在に祭り上げた。彼女の命を救うことは、君の存在価値と結びついていた。そうだろうか？」

「そんなこともありうるだろう。」

「じゃあ、もうひとつ説明しよう。^{ずいまく}髄膜炎が、その感染性からして、結核の仕業であることを、君は無視出来なかった。ぼくは断言するが、半世紀前のロマンチスト作家のように、あらゆる経験知に逆らって、その時の君は^{ずいまく}髄膜炎を《倫理的なショック》のせいにならんとしようとしていた。否定できるかね？」

「否定はしない。」

「何故かと云うと、たとえ科学的に見た場合、それが嘘であっても、《興味深かった》からさ。」

ああ、空想力、しかも病める空想力という奴は！ 何と多くの味わい深く、奇抜で、危険で儂い^{はかな}幻想をかもし出すことか！ 恋する人に偶然出くわすと、ぼくは一見して見抜けるのだが、顕微鏡でも見えない神秘的な微生物を、彼の額を通して見るような気がいつもする。その微生物は、女性の小さな指なら、しばしば破れてしまう罌^{わな}の巣を巧みに編んでゆく蜘蛛^{クモ}の形をしている…」

「何て馬鹿なことを云うのだ、気でも狂ったのか！」

「信じてくれ、カルロ。やがてぼくが官能微生物^{エロス・バクテリア}（とでも名づけるつもりだが）とそれを無毒化する血清を発見した日には、何百年間にもわたって恩恵を蒙ってきたもっとも偉大な奉仕を、人類にお返しすることになるであろう。」

「馬鹿な、普通じゃないぞ！」

「いつの時代にも大量の死者を出し、それに対する有効な治療法がないと信じられてきた不可解な病気（文明の発達とともに、ますます複雑になり致命的な症状を呈するようになっていく病気）からようやく解放された暁には、その時になって初めて人類は、完全無欠な状態にいたる歩みを開始するであろう。我々は自由になる。やっと自由を手にするであろう。したがって、強くなるであろう。何故と云えば、あらゆる自由を獲得したと思いついでいる我々は、その時点まで、単に我々の行動を思いのままに操っている哀れむべき虫けらの奴隷に過ぎなかったからだ。」

「頭が変だ、どうかしている！」

「さあ、見ているがよい。世界を大騒ぎに巻き込む発見を。もしクレオパトラの鼻が1センチばかり長いか短かったとすれば、羅馬^{ローマ}帝国の行く末はもっと変わったものになっていただろうと謂われている。民衆の歴史に関して、そう謂えるのではないか？ 民衆が新しい平和な環境のなかで気高い発展を遂げることができる折に、彼らがどれだけ自己を高めてゆくか、それをいったい誰が実際に予見することが出来るのか？ 考えてみる、家族に保証された静けさや、社会に保証された秩序を。《妻を探し出せ！》などと叫ぶ声は聞かれなくなるだろう。というのは——君は同意しなければならぬが——情念に駆られた犯罪がなくなれば、犯罪全体の一番暴力的な暗い事例は鳴りを潜め、いふなればほとんど…普通の規模のものに縮小されるだろうから。」

「しかし、そんなのは屁理屈^{へりくつ}だ！」

「さあ、答えてみる。ヘレネーとパリスの狂気の愛がなかったなら、トロイ戦争は果たして起こっていたらどうか？」

「イリアス物語ですら書かれなかった。」

「ああ、笑え、遠慮なく笑ってくれ。ジューリオ・ブリッツィのことを人々が噂する日が、そのうちに来るぞ。その日になれば、彼の栄光は、ダーウィンやニュートンやパスカルやパスツール¹⁶⁾やペーリンクの栄光をかき消してしまっているだろう…」

「ただ、それだけかい？…」

「…彼の名前は、人類に恩恵をもたらした偉人たちの名前の仲間入りをしているだろう。」

「嘘つけ！」

彼らはまくしたてながら、笑い、一步ごとに立ち止まっては、ナツィオナーレ街の大方を下って来て、マーニャナポリ広場にたどり着いていた。小さな庭園が中央の棕櫚の樹を取り巻いて、焼けた通りの白く眩しい照り返しを殺すように、砂漠のオアシスさながら青々と緑を滴らせていた。右手に、人気のないタイリナーレ王宮へと横丁が上り坂になって続いていた。左手に、くっきりとした輪郭を持つトル・デ・スペッキ教会の優美な正面壁が聳えていた。その背後に、豪華な門蹟修道院があって、法王時代のローマには、ヒラヒラと波打つ面紗を着けた美しく尊大なシスター修道尼たちが、素晴らしい歌声を響かせ、王侯貴族の賓客を迎え入れ、まるで古代ウエスタ神殿の巫女たちが戦車競技場の見物に出かけるように、二頭立て馬車に乗って観劇に赴いたことだろうと想像させた。教会堂横にあるヴィツラ・アルドブランディーニの庭園は朗らかな姿を現して、古代の城壁の頂から広場を睥睨していた。クラヴェリはその城壁の下で立ち止まると、ブリツィの事を同情するかのように眺めやって、自分の陽気さ加減をグッと抑えた。

「これが恋だったわけだ。だろう。」—— やがて感情の発作に打ち克つと、無礼な態度を取ったことをいつものようにあっさりと詫びたいと思い、彼は続けて云った——「君が誤りようなない症状から、それと認めたいと思っている以上は、ほくはそのことに異議を申し立てはしない。《正直者の》恋だったとか、むしろ君の云うような《意地悪者の》恋だったという点は、ほくは絶対に賛成しないが。」

「ただ一回しか愛したことがないのに、それがどうして分かるというのか？ 比較するにも、君には根拠がない。」

「それは結果論だ。ほくの物語は、今まででもっとも卑俗な部類に入るからじゃないのかね？」

「むしろ…もっとも宿命的な部類に入ると云いたい。」

「考えてみろ。瀕死の綺麗な少女が…」

「…救世主を演じている若い医師が…」

「たった二人だけで、日夜、処女の部屋に籠りっきりで…」

「うん、分かる。」

「希臘悲劇の主人公のように陰気な継母が…」

「…中世の魔女のように恐ろしい家政婦が…」

「すべては悲劇的な神秘の影に包まれている。25歳前後の若造の空想力をかきたてるものが何かあったと、君なら分かるだろう…」

「同感だ。」

「ほくが想像力を逞しくしたとしても、当然至極じゃないか。」

「当たり前と、云ったほうがよい。」

「実際、異常な出来事は、ここから始まるのだ。官能微生物の理論を覆し、未来の人類に恩恵を齎す偉大な人間の判断を狂わせるほど奇妙なものなのだ…」

「へえー！ うかがおう。」

「聞いてくれ。3日目の晩のことだった。ぼくは、病気の少女と二人だけだった。隣の部屋の長椅子で、サイコウラは居眠りをしていた。昼間ずっと溜息ばかりついていたアナーイデは、ようやくウトウトし始めていた。午後起こった脳脊髄圧の上昇という症状と格闘するために、ぼくはクヴィンケ式腰椎穿刺^{せんし}¹⁷⁾の処置^{ほどこ}を施していた。それ以外に手の打ちようがなかった。科学^{サイエンス}が提供してくれるありとあらゆる治療法がもはや尽きてしまって、不測の事態でも起こってくれなければ何もできないと解ると、ぼくは自分の非力を悲しく思い内心^{じくじ}忸怩たるものを感じ、医師愛そのものにも、自分の男性的強さにも傷つき、急激な好転の兆候が見られないかと様子をうかがっていた。その時のぼくの気持ちは、降参するに先立って、形勢^{くつがえ}を覆してくれる援軍を待ち望んで地平線の彼方をうかがう將軍の苦しい胸の裡^{うち}に等しかった。周囲のものすべてが寄ってたかって、ぼくの神経^{せいかん}を逆撫でした——いったい誰が、その時までぼくのいらいらに気付いてくれただろうか？——あまりにがらんとだだっ広い部屋。パチパチ音を立てている小さな真鍮製^{しんちゅう}ランプの燈芯。その立ち上る油煙^{しゅうえん}が漆喰壁の上に演出する奇妙な長い影。むき出しの天井^{てんじょう}の梁^{はり}ときては、そこに精力的なツトガの一隊が騒々しい製材所を設けているかと思われたほどだ。冬メロンやカーチョカヴァッロ・チーズ^{ザクロ}や柘榴の実や細い腸詰^{サルシツチェ}が紐に吊るされていて、ぼくの頭の上で、長く丸い先端部分をブラブラ揺り動かしているかと思われ、そこから田舎の食料貯蔵庫に^{ふさわ}相応しく、よく熟した濃厚な果汁をたっぷり含んだ甘辛風味の入り交ざった香りが一斉に漂ってきていた…ところが、ぼくを特に困惑^{こんわく}させたのは、キルト地のベッド・カヴァーの下で、麻痺したように身動きひとつしない彼女の様子だった——熱^{あつ}っぽく空ろな眼差しをした彼女は、ぼくにはすでに棺桶^{かんおけ}の中に納まっているように見え、ぼくの無能な両の手は、その眼^{なまこ}を閉じるため以外に役に立たないかのようだった。いったい何が彼女を眠りに陥^{おちい}らせたのか——ぼくは自問自答した。それは、ただ単に徹夜したために衰弱をきたした肉体の反応だったのか、生命の復活が準備される休止状態だったのか？ 眼には見えない自然の威力が、突撃の合図で立ち上がるべく体力を蓄^{たくわ}えて用心していたのか、あるいは悲しい宿命が、不可抗力的に現実のものになろうとしていたのか？」

(つづく)

註と参考文献

本稿のために使用したテキストは、Clelia Romano Pellicano, *Novelle calabresi* (Torino 1908) で、今回は 233 頁から 258 頁までの前半部分のみを試みに邦訳・紹介してみた。

人生 50 年の時代にクレーリア・ロマーノ・ペリカーノ (1873 年カステルヌオーヴォ・ディ・ブーリア生まれ、1923 年ナポリ歿) は、ジャンドメーニコ・ロマーノ男爵家の第 4 女としてこの世に生を受け、16 歳でリアーリオ＝スフォルツァ公爵家のフランチェスコ・マリーア・ペリカーノ伯爵に嫁ぎ、ジョイオーサ・ヨーニカ (レッジョ・カラーブリア地方) とナポリのカステッラマーレ・ディ・スタービアの屋敷やローマの別荘で次々に誕生した 7 人の子供の養育に励んだ。しかし、1909 年に 36 歳で未亡人となると資産運用のためにプラテリーア (カラーブリア地方) で

林業株式会社を興すとともに、ローマでサロンを主宰し、月刊雑誌《ヌオーヴァ・アントロジーア》にも《フレグレア》にもトリノーの隔週刊雑誌《女性》^{ドンナ}にも投稿した。そればかりか、7年前に結成された国際女性会議《我らが連盟》に、CNDI（イタリア女性会議）のメンバーとしてロンドンに赴いている。フランス語と英語に堪能だった彼女は、その決して長くはない生涯を賭けて、女性の自由と男女同権と参政権獲得のために奮闘した本来の意味でヨーロッパ人だったと言える。彼女の基本理念は、次のようなスピーチに如実に表れている。

「皆様が、正午の太陽が輝く土地から南十字星が煌めく土地までを含め、あらゆる人種あらゆる国を代表する女性であることを思い出して頂きたい。ここに皆様が集ったのは、自由と男女同権という共通の悲願を実現するためです。わたくしたちの絆は、モットーとしての婦人参政権です。文明化された世界のすべての女性が、今日まで法律と慣習によって無能者と劣等者と烙印を押されてきた悪評から、永遠に解放されるまでは、わたくしたちの使命は続けられるということを心に銘記致しましょう。」

もちろん男女の両性が構成する人間社会の改善は、相互理解と尊敬に基づくと彼女は考えていた。彼女の夢が現実のものとなったのは、しかし歿後四半世紀以上経った1945年2月1日のことであった。パルミーロ・トリアッティとアルチーデ・デ・ガスペリの尽力によって第23条《婦人への投票権の拡大》が明文化され、イタリア女性の参政権が認められたからであった。

作家としては、『二人三脚あるいはカップル』や長編小説『運命に向かって』など自然主義的傾向の強い短・長編小説を書いた。その大方は散逸してしまったが、『カラーブリア物語集』のみ原稿が保存されている。彼女が親しんだ地方の農村の現実と庶民の女性疎外などをテーマに選んでフローベールやモーパッサン風に書かれた短編小説集から、今回は医療ものに属する一篇を試みに邦訳・紹介してみた。

- 1) 一過性発熱 ^{エフェメラル・フィーヴァー} ephemeral fever とは、おそらく皮膚に発疹の出る地中海発疹熱か、潮紅斑を生じる地中海紅斑熱のことかは不明であるが、いずれにしても1日程度の短期間の発熱を症状とする風土病であろう。
- 2) 麻疹 ^{はしか} rubella は、飛沫感染する麻疹ウイルスが原因で、9～11日の潜伏期を経て発症する発疹を伴う小児急性伝染性疾患のことで、2～3日の前駆期、3～4日の発疹期を経て回復期に至る。生後3ヶ月までは母体の中和抗体によって罹患しない。その後、ほとんどの子供が小学校低学年までに罹患し、一度罹患すると終生免疫が生じる。
- 3) 犬の咳については不明。
- 4) サラマンダー ^{サンショウウオ} salamander とは、一般に山椒魚を指すが、火中に住むとされた伝説上の火蜥蜴 ^{トカゲ} のこと。
- 5) 悪液質 ^{カヘキシー} cachexia, cachexy とは、古くは体液病理学説の血液混合状態の異常を指すことばであったが、現代では梅毒、結核、血友病、癌腫などによる全身の衰弱状態を指す。全身の衰弱と貧血特有の黄灰色を呈する皮膚蒼白や、眼瞼や下腿などの軽度の浮腫、皮膚の色素沈着が見られる。
- 6) マリ・フィリベール・コンスタン・サペエ (Marie Philibert Constans Sappey 1810-1896) フランスの解剖学者でリンパ系に関する重要な業績を残した。
- 7) M' imbizzate 'u leju?
- 8) 'A gnuricèja se more!' a gnuricèja se more!
- 9) vhancale
- 10) 髄膜炎 ^{ずいまく} meningitis とは、一般に急性軟髄膜の炎症を指す。化膿性髄膜炎、流行性髄膜炎、結核性髄膜炎、真菌／無菌性脳膜炎に分類され、ストレプトマイシンを処方する結核性を除けば、それぞれスルホン剤やペニシリン剤などの抗生物質による治療が一般的。

- 11) Amàra, amàra! E che n' daju 'u te fazzu, eo, ca sugnu cchiù morta 'i tija? Morta sugnu, figghia! Distrutta! Distrutta cume la me' vita!
- 12) Jatevinne! Nun vogghiu 'mu ve viju! Nun vogghiu 'mu ve sentu! Jatevinne!!
- 13) 鳥兜は、北半球温帯以北に広く分布する約 300 種の鳥兜属 *Aconitum* L. のことで、ジテルペン系アルカロイドである猛毒アコニチン（半数致死量 0.3mg）、メサコニチン、ヒパコニチンなどを根に含み、本邦でも烏頭、附子、天雄と称され、八味地黄丸等の漢方薬に配合される。南欧からバルカン半島部にかけては、Helmet Flower の名称で呼ばれる *Aconitum anthora* L. が分布し、その根は *Radix Anthorae* として古代ローマ時代には継子殺しに多用（《継母の毒》）されたという。アコニチンの薬理作用は解明されていない。
- 14) 芥子は、阿片 *opium* の原材料として栽培される芥子科 *Papaveraceae* の鬼芥子 *Papaver somniferum* を初め、さまざまな品種（虞美人草など）が広く世界に分布する。日本および各国薬局方は、イスタンブールを集散地とする土耳其阿片 *Turkey opium* がモルヒネ含有量 10～20% と優良品なので、これからモルヒネを初め、共通した分子構造のモルフィナン骨格を利用して、鎮咳薬コデインや睡眠薬ナルコチンや筋肉弛緩剤パバヴェリンなどの阿片製剤が作られている。
- 15) ラクトフェリン lactoferrin は、赤血球が鉄分を運ぶ際に関与していると考えられるトランスフェリンのことで、数種類の哺乳類の乳汁でも、特にヒトでは高濃度に含まれている。
- 16) ルイ・パストゥール（Louis Pasteur 1822-1895）は近代細菌学の父で、炭疽病予防ワクチンの開発、悪性水腫菌とニワトリ・コレラ菌の発見、肺炎菌と連鎖球菌の観察、低温殺菌法の確立、1885 年狂犬病予防法発見の功績により国際勲金でもってパストゥール研究所を設立した。弟子のシャンベルラン（Chamberland 1851-1908）は、120℃ 以上で手術関連用具の滅菌処理可能な世界初の高圧蒸気滅菌器を制作した。
- 17) クヴィンケ（Heinrich Irenaeus Quincke 1842-1922 ドイツの内科医）式腰椎穿刺とは、第 3 腰椎のクモ膜下腔へ中空の穿刺針を刺して髄液を得る処置法のこと。
- なお、註記作成に際しては、以下の参考文献を参照した。
- 堀田満その他編集『世界有用植物事典 *Useful Plants of the World*』（平凡社 1989）
- 『南山堂医学大事典 *Nanzanndo's Medical Dictionary*』（南山堂 1985）
- 『ステッドマン医学大辞典 *Stedman's English-Japanese Medical Dictionary*』（Medical View 1981）
- 稲垣勲ほか編『生薬学』（南江堂 1966）